

シェイクスピアを読み直す

－ 身体論登場とその背景 －

村主 幸一

身体の時代

私はシェイクスピア演劇を研究しており、ここ十年ほどのあいだ「身体」というテーマで論文を発表してきました。今回の公開講座で私が担当する回は、「シェイクスピアの身体論」という内容でお話したいと思うのですが、シリーズ第一回目に私が当たっていることもあり、できるだけ大きな視点から話を進めたいと思っています。¹⁾

先ほど申し上げましたように、私はシェイクスピアにおける身体を研究テーマにしていますが、その一方で、社会における身体問題一般にも関心があります。そういう関心をもって、新聞やテレビを見ていますと、身体に関係した記事やニュースが多いのに少々驚かされます。思いつくままにそのトピックを挙げてみますと、セクハラ、抗菌グッズ、エイズ、臓器移植、クローン、環境問題、古武術、なんば歩き、ウォーキング（術）、様々なセラピーや癒し（アロマ・セラピー、学習セラピーなど）、代替医療（反射学、同毒療法など）、性暴力、家庭内暴力、児童虐待、子ども用の化粧品、高齢化、少子化、介護、自然食品、摂食障害、過労死、ロボット、死の教育、終末期医療などなど。そして、このような身体に関係した話題を扱う必要のない新聞のコラム、例えば朝日新聞の「天声人語」までが、その種の問題を扱ったことがあります。私のスクラップブックに保存してあるその記事は現代の若者のそばの食べ方が変わってきたことを述べています。伝統的なそばの食べ方はズルズルと音を立てる方法であったのが、最近の若者は音を立てないというのです。²⁾ 私はその記事を読んだとき「身体技法」という言葉が頭に浮かびました。この言葉はフランスの

社会人類学者マルセル・モースが使った言葉です。モースは贈り物の研究である『贈与論』で最もよく知られていますが、また身体研究にとっては重要な「身体技法」³⁾ という論文を書きました。その論文をモースが発想した一つのきっかけは、第一次大戦中に観察した英軍兵士と仏軍兵士の身体の習慣の違いでした。例えばシャベルの使い方や行進の仕方が違っていたのです。その違いの程度も、フランス製のシャベルを取り替えなければならない程、またフランスのラッパの鳴らし方を変えなければならない程のものであったということです。そばの食べ方の変化に注目した「天声人語」の筆者は、それこそ「身体の時代」の空気を吸っていたと言えるのではないのでしょうか。

II 身体への知的関心

このような身体への関心はたんに一般社会に見られる一種の流行なののでしょうか。それとも知識の世界にもそれと並行するような変化はあるのでしょうか。じつは身体に関係した新しい研究領域の誕生や身体への学問的関心が散見されるのです。私が知る範囲でその例をいくつか申し上げます。まず第一は、1994年に弘文堂から刊行が始まった全部で15巻からなる歴史学事典は、その第二巻のタイトルを「からだとくらし」としています。読者の皆さんにも思い出していただきたいのですが、高校で私たち（私はいま50代の前半です）が学んだ歴史の教科書のなかにはそのような話題があったのでしょうか。その巻の編集責任者である樺山紘一氏は、この本が「歴史学に新たな素材を提出し」、また「従来の歴史学における欠落」を指摘しているといいます。しかし、そのこと以上に、それらの題材を扱うこと自体が、「現代におけるつよい課題意識の表明」であると強調して述べています。⁴⁾ 第二の例として、現代イギリスの代表的な社会学者アンソニー・ギデンズによる優れた社会学の入門書を取り上げたいと思います。この本はそのタイトルも『社会学』(Sociology) といいます。現代社会の全体像を扱った、この700ページを超える浩瀚な入門書は、数年ごとに改訂を繰り返しています（1989年に第一版、1993年に第二版、1997年に第三版、そして2001年に第四版）。そして画期的なことに、第三版⁵⁾ において新しい章が二つ加えられました。その一つは「身体社会学」です。第三の例として挙げたいのは、『宗教学批評用語事典』です。この本の著者の一人によりますと、宗教学の批評用語として、例えば「神秘主義」という語が廃れ、「身体」という語が頻出するようになりました。そして、その変化は宗教学に

おける重要な研究動向を示すものであると述べています - 「今まで神学者が認識していた以上に、宗教は身体の意味論のなかに位置を占めていたことが認識されている」。⁶⁾ 以上のような「身体」への新しい関心は、新しい研究領域も誕生させています。すなわち、老年学、障害研究 (disability studies)、パフォーマンス研究、ダンス研究、ポルノ研究、強姦研究、いわゆる「身体論」、医療人類学、健康の社会学、死生学、身体史、女性学、男性学、同性愛研究、スポーツ社会学など。なにか社会の変化とともに、知の世界における変化も感じさせる現象ではありませんか。

学問の世界において、力点の移動があったことがわかります。その背景について知るため、身体史の領域において大きな足跡を残したロイ・ポーターの説を見てみましょう。⁷⁾ ポーターは、西洋思想においては古代から現代に至るまで、「身体的なるもの」(the somatic) の軽視があったといます。古代ギリシア哲学では理性を上位のもの、肉体を下位のもの・無秩序なものとして捉えました。中世のユダヤ・キリスト教は、原罪によって墮落した人間のもつ肉欲と、神的なものを対比しました。また修道院ではそのような人間の罪を生む肉体 (flesh) を痛めつける苦行が行われました。ルネサンスは人間存在の無限の上昇の可能性を謳った時代でしたが、そこでも人間の精神的上昇が主張されました。近代においてはデカルトが心身二元論の立場を取り、その流れは連綿と続いているとしばしば言われます。

「生きられる身体」の面ではどのような変化があったでしょう。伝統社会では身体は人が知るすべてでしたので、個人にとって大変重要なものでした(例えば様々の技とその伝授)。ところが文明が進歩しテクノロジーが発展すると、テクノロジーという「人間の延長」が身体を矮小化していきました。その結果、社会は「有機体」の一つとみなされなくなり、心身は機械とのアナロジーで語られるようになりました。また国民国家の成立と産業社会の勃興によって、肉体は国家と産業の資源として捉えられ、国家や産業が利用するものになりました。すなわち、強い兵力や豊かな労働力として、肉体は新しい意味での資源となりました。また消費社会のなかでは「美しく健康でセクシーな肉体」は価値の源にもされています。

ポーターは、身体研究を促した力として三つのものを挙げています。一つ目は、エイズです。これは現代人にかからだの脆さを感じさせました。二つ目は体制イデオロギーへの批判・多文化主義の主張・アイデンティティの政治から由

来するところの、体を使ったアピール（ファッション、装飾、刺青、ピアスなど）です。三つ目は女性・同性愛者の社会運動です。身体は地域的变化や歴史的变化がないものと、私たちは漠然と思い込んでいました。そしてまともな研究には値しない価値の低いものと蔑んでいたのです（身体が差別と密接に関係していることは、子どもが友達の悪口を言うとき身体的なことに言及することからもわかります）。ところが今や、身体が不変のものではなく、可塑的であるという認識は身体を研究する人々に共通のものとなりました。身体の観念・表象はもちろん、身体の物質性（形・機能）もまた、その社会が奉じるところのイデオロギーと密接に関係しており、文化的・社会的要因によって構築されている部分があるということが次々と具体的にわかってきたのです。例えば、ミッシェル・フーコーは彼の『性の歴史』のなかで、近代西洋に見られる性に対する異常なほどの「科学的」関心は、キリスト教における告白の歴史と密接な関係があると指摘しました。⁸⁾

この変化について、私たちは次の点を指摘できると思います。第一には制度や政治的指導者・偉人の研究から、普通の人々や日常生活の研究へと方向転換しようとしていること。第二には、社会のイデオロギーと身体とが密接に関連しているなら、身体を研究することは、ミクロな部分や私的な部分に現れる政治の研究であること。この場合、政治という語は「権力者による統治・管理」を意味しません（例えばジェンダー・ポリティックス）。第三には、際限がないとも見える研究対象の拡散です。身体の研究は一見些細と見えるものにも及んでいます。例えば、コンタクト・レンズの色の研究、アイスクリームの広告の研究、バービー人形の研究など。これらも研究対象となるならば、身体研究がカバーする範囲は非常に広く、また多様であると言わざるを得ません。そして、これらの例に対して「些細」と我々が感じるとしたら、そこには取り立てて問題になることはなにもないという先入観があるからではないでしょうか。私は身体研究の論文を読んでいて、それら「些細」な素材を扱う論文に、あっと驚かされた経験が何度もあります。この新しい研究領域は知的興奮を誘うものです。しかしその一方で、身体を研究対象とすることは独自の困難を伴っています。なぜなら身体は「根深く内面化しているゆえに」⁹⁾ 身体を歴史化・対象化することがむずかしく、近代的身体のパイアスをそのまま過去に持ちこみやすいからです。とくに近代以前の身体は、現代人である我々の身体感覚をもって類推することは危険です。痛み、快感、味覚、性欲、加齢、病、妊娠、

出産、死などの身体的な経験は、そのなかの一つを研究対象とするだけでも大仕事となるでしょう。

シェイクスピアの身体論

シェイクスピア研究における身体への関心は確かに近年の知的動向以前にもありました。シェイクスピアをひとつの頂点とするエリザベス朝演劇は、演劇史的には中世末期の民衆文化がもっていた様々な娯楽を総合・融合したものとしてスタートしました。¹⁰⁾ この観点からは、シェイクスピア演劇と祝祭（カーニバル）との関連が指摘されています。バフチーンが民衆文化のシンボルとして描き出したグロテスクな身体¹¹⁾ がシェイクスピアの演劇の中にも発見されました。また演劇の方法は当時の絶対君主たちがみずから活用した方法でもありました。地方勢力を武力によって制圧するだけの力をもたなかった彼らは演劇的手法を政治の中に持ちこんだのです。また王位継承に係わる「王の二つの体」という宗教的政治的観念があり、¹²⁾ シェイクスピアは主に英国史劇においてこの観念を劇化しました。

しかし、近年の身体への知的関心の現れと並行する形のものとは長く現れることはありませんでした。これをシェイクスピアの身体論と仮に呼ぶことにしますと、これはシェイクスピア研究における比較的新しいアプローチ（新歴史主義とフェミニスト批評）がそれぞれ目ざましい成果を挙げた後に登場してきました。同じ頃、身体論の爆発的展開が社会科学・人文学などのさまざまな分野で現れ出でようとしていたのです。

IV ちょっと予備知識を

1 シェイクスピア劇作品の予備知識（37 作品）

シェイクスピアの作家としての発展をみると、大まかに言って、最初の段階では喜劇と史劇を平行して書き、中期に悲劇を書き、その作家生涯の晩年にロマンス劇を書きました。喜劇では若い男女の恋愛が扱われます。そのなかでもロマンティック・コメディと呼ばれるものは、若い男女が恋に陥り、お互いの気持ちを確かめ合い、結婚へと到るプロセスが扱われます。彼らの恋の関係が性欲・暴力・嫉妬・裏切りから守られているのは、シェイクスピアの喜劇の世界が魔法的な力で人々を保護しているからです。その典型は、女性主人公の男装でしょう。若者が恋を吐露しても、それは正体を明かさぬ娘に対し

てなのです。ですから、逸脱しがちな性的力も虚構の枠組みによって、人を直接的に傷つけることがないのです。シェイクスピアは喜劇の題材をもっぱらイタリアのノヴェラと呼ばれる小説から採りました。

それに対して史劇は、ホリンシェットの年代記がその題材を提供しています。史劇の中心は、国王とその王子、父と息子の関係が中心です。王子は、父王の跡を引き継ぐことができる能力があることを証せねばなりません。その能力とは乱世を生き抜くための暴力性を伴った男性性です。この英国史劇の世界では、女性は大きな役割を演じることはなく、従って、男女の関係、セクシュアリティの問題は後景に退いています。

悲劇は、それまでのシェイクスピア喜劇が避け、また英国史劇が扱わなかった要素を前景へと押し出します。すなわち、権力の移譲の問題に加えて、性的な裏切り、破壊的なセクシュアリティなどです。恋愛が虚構的仕掛けによって守られ成就される喜劇的世界とは隔絶し、性的空想は汚れたものとして提示されます。また、歪められた性的空想から暴力が突発します。

ロマンス劇は、劇の冒頭で悲劇的世界がもっていた破壊的要素を提示しながら、劇の後半では今一度それを救済しようとします。破壊されるのは、人間の信頼関係です。人間関係が破壊され、そのなかで肉親もバラバラになってしまいます。しかし、長い時間がたって、失われた娘が発見されます。それと共に、頑なであった主人公の自我が溶解し、人間性が回復されます。その場面は大きな驚きとともに現れます。

普通、シェイクスピア劇の全体をジャンルの観点から概観するとき、だいたい以上のようにまとめられます。しかし、研究者たちがさらに細かい分類をしようとするときには、他に「ローマ史劇」と「問題劇」の二つを立てることがあります。ここでは、ローマ史劇の一つを扱うつもりですので、これについて少し述べておきましょう。

2 ローマ史劇を読むときの基礎知識 - 古代ローマの政治制度の変化

シェイクスピアは英国史劇の題材をホリンシェットの年代記から得ていますが、ローマ史劇の題材はだいたいローマ時代の歴史家プルタークから採っています。そしてローマ史劇とは、文字通り古代ローマの歴史を扱っています。ローマ史劇の作品世界は、それぞれの世界が想定されている政治形態と密接な関係がありますので、まずそれを確認しておきましょう。ここで扱うローマ史は

あくまでもシェイクスピアの理解に沿ったものであるとお断りしておきます（すなわち、西洋史学の理解とは異なる部分があるかもしれません）。古代ローマはその初期においては王制が敷かれていました。独裁的な君主の悪事はシェイクスピアの物語詩『ルークリスの凌辱』で扱われています。貞淑な妻ルークリスを辱められたコラティンは悪しき王タークィンに復讐します。タークィンの名前は、この作品以降も国民を顧みない王の代名詞として、シェイクスピア作品に登場するローマ人の口にたびたびのぼります。ローマは王政のあと、共和制に移行します。共和制下の世界を描いたのが、『ジュリアス・シーザー』と『コリオレーナス』の二つの劇です。シェイクスピアの作家生涯で言うと、『シーザー』はその初期に、『コリオレーナス』は後期に書かれました。どちらの作品世界においても、独裁君主への不安が一要素となっています。共和制から帝政へ移行する段階を扱っているのが、後期の作品の一つ『アントニーとクレオパトラ』です。オクテーヴィアス・シーザーは、他の政治指導者を倒して帝政への道を開きます。『タイタス・アンドロニカス』は初期の作品ですが、古代ローマの歴史では、最後の段階である帝政期を背景とする復讐劇です。残された紙面で、身体論の観点から『コリオレーナス』について分析を試みたいと思います。

V 『コリオレーナス』を身体イメージから見てみよう

1 階級と公職名

この劇の社会階層はおおまかには貴族 (patricians) と市民 (plebeians) の二つに分かれています。この劇では、身分の違いは大変重要です。社会階層の感覚は劇冒頭の食料一揆によって喚起されます。飢饉によって市民には食物が不足し、そのような社会的不公平が起きるのは、貴族が食物を退蔵しているからだとして市民は想像しています。このときの市民の要求によって設置されるのが、護民官という民衆の意見を代弁する立場の人々です。あと、執政官というのがあります。これは貴族と市民からの投票によって選ばれ、大きな権力をもって具体的にローマの政治を運営する役割です。もうひとつ、元老があります。これはローマの貴族の長老格の人々のようです。劇そのものからは、どのような公的な役目があるのか、具体的なことは不明です。

2 あらすじ

この劇の主人公は外敵との戦争の場面では超人的な英雄ですが、国内政治には向かない性格の持ち主です。以下に場面ごとの荒筋をたいへん大雑把に書いておきますので、すでに作品を読まれた方は劇の展開を思い出す助けにしてください。

一幕一場：市民たちの食料一揆。護民官が誕生。

一幕二場：敵方（コリオライ）

一幕三場：母ヴォラムニア、息子マーシャスの戦場での勇姿を空想する。

一幕四場～八場：戦場。母の空想そのままのマーシャスの活躍。

一幕九場：新しい名前「コリオレーナス」を与えられる。

一幕十場：敗北の敵将オーフィディアス。

二幕一場：凱旋。ヴォラムニア、息子の将来への夢をもらす。護民官のつぶやき。

二幕二場：護民官のつぶやき。

二幕三場：執政官選挙。「謙虚の衣」(a gown of humility) を着たコリオレーナス。

三幕一場：社会の大混乱。

三幕二場：ヴォラムニア、息子を説得。

三幕三場：民衆「我々がローマである」、コリ「俺がお前たちを追放する」

四幕一場：追放の刑を受けた主人公、家族や友人と別れ。

四幕二場：母、護民官たちをののしる。

四幕三場：その後のローマ。市民たちの平和を楽しむ様子。

四幕四場：アンシャム（敵の町）に現れた主人公。敵方につく。

四幕五場～七場：敵の攻撃の報に怯えるローマ。

五幕一場～二場：ローマからの助命嘆願の試み（友人たち）失敗。

五幕三場：女たちによる助命嘆願、成功。息子のローマ攻撃は母の「腹」(5.3.124) を踏む行為。

五幕四場～六場：オーフィディアスの陰謀、主人公殺害される。

3 この劇の捉え方--複数の身体のお話

従来の研究では、この劇が身体のお話だというのは定説になっています。身

体のイメージを通して個人の物語が語られ、また、身体のイメージを通してローマ社会の物語が語られます。そして両者は絶えず共鳴し合います。例えば、いくつかの重要な場面において、一人の人間がローマ全体を含んでいるという印象があります。一人の人間の体が国家全体を表象する瞬間があります。

そのような感受性は、劇冒頭でメニーニアスが語る腹の寓話によって喚起されます。この寓話は、劇全体を寓話の影響の下に眺めるようにという要請であると感じられます。腹の機能は、体内へ摂取された食物の消化です。腹は、栄養を血液に乗せて、他のすべての器官に送り出します。この劇は、ローマの消化作用についても語っています。では、その寓話を見てみましょう。

私はどんな食物でもまっさきに受けとりはする、
だがそれで諸君は生きていけるのだ。それも
当然の話だろう、なにしろ私はからだ全体の
倉であり店であるのだから。思い出していただきたい、
私はそれを血液の流れをとおして送り届けている、
心臓という宮廷にも、脳髄という王座にもだ。
さらに、人体のあらゆる廊下や小部屋をとおして、
もっとも強い筋肉から小さな血管にいたるまで、
私からいのちの糧である栄養分を受けとらぬものは
一つとしてないのだ。

(1.1.128-37)

この寓話を文字通り受け取るならば、これは、一人の人間の血が国家全体を養うという観念を表明しています。ところで、シェイクスピアの時代の人々は食物の消化についてどのように考えていたのでしょうか。消化作用の理論はまったくの統一がないまでも、骨格においては大体次のようでした。まず、口によって食物が柔らかげられ部分的に液化されてからは、胃がいわゆる第一の消化を行ないます。胃は食物を乳糜 (chyle) に変えます。その液状のものの一部は、腸によって吸収されます。腸は、乳糜を腸間膜の静脈を通して肝臓に送ります。ここでいわゆる第二の消化作用がおき、乳糜を血に変化させます。第三の消化は心臓で行なわれます。心臓はさらに血の一部を精製し、動脈中の生氣 (spirit) と混ぜ合わせます。各器官は、さらに一部の血を精製し、これを精液 (semen) に変えます。これを消化の第四の段階と考えていました。

この寓話について言及されていないのは、いったい栄養（血）の源はどこにあるのか、という問題です。劇では、食料一揆の場面あと、主人公が戦場で超人的な活躍をする戦闘の場面がきます。そして、その二つの場面の間に、家を守る女たちの場面が挟まれており、そこでは息子マーシャス（主人公コリオレーナスの初めの名前です）の戦場での活躍ぶりを幻視するヴォラムニアの言葉があります。話を混乱させないために、先回りして議論の展開を予告しておきますと、このヴォラムニアの言葉の中に含まれる身体イメージを媒介にして、寓話と主人公の戦場での活躍が結びついてくるのです。

3 コリオライ戦

先ほど、主人公はこの戦で超人的な活躍をするといいましたが、その肝心なところは観客の目から隠されています。戦いの最中にマーシャスは、たまたま開いた城門の中に単身撃って入ります。部下たちは指揮官の無謀な行為に加勢をしようとはしません。城壁はマーシャスだけを飲み込んだまま、閉じてしまいます。すなわち観客は主人公の（恐らく）超人的な活躍を見ることはできません。日本の大学において教鞭をとったこともある、優れた英文学者エンプソン (William Empson) は、マーシャスは城の内壁を背にして、背後からの敵の攻撃を受けないようにして戦っただろうと推論します。¹⁴⁾ そして、エンプソン自身がかつて中国の万里の長城を訪れた経験があるところから、コリオライの城の壁も同様なもの、すなわち、城壁の上を走る通路があり、そこへ登るための階段が、内壁に設置されていると考えるのです。劇のテキストには、梯子が言及されており、この梯子を使って城の外に出たという結論です。またこの劇の上演史についても触れておきましょう。城壁から現れたマーシャスの体は血を流しているのですが、上演での流血は、彼が負傷していることを示す程度なのです。¹⁵⁾ 私はエンプソンとは違う読みをしています。ローマが超人的なものとして顕彰するマーシャスの活躍が、舞台上の人間たちと劇の観客に見えない仕掛けになっているのは、そのままに受け取るべきだと考えます。すなわち、エンプソンのように、隠されたものが何であるか透視しようとするのは間違いではないかと思うのです。コリオライ戦は不思議な場面です。コリオライの城を私は「魔法の箱」と読んでいます。そこに入った人間は次元の異なる存在になって出てくるのです。その印が、「まるで生皮をはがれた男のようだ」（一幕六場）と形容されるマーシャスの体を覆う血です。上演史が示すような

負傷の印の血では不十分なのです。(題材となったプルタークでは城に討ち入るときマーシャスが部下を従えていることも合わせて考えると、なおさら人目から隠された単独の活躍はシェイクスピアのオリジナルであると思えてくるのです。)

4 国家への授乳

メニーニアスの寓話を扱ったとき、食物の源は何かという問い掛けをしました。戦場でのマーシャスの体をおびたしい血が覆っています。それは誰の血なのでしょう。一幕(戦場)においては、彼の体を流れる血は必ずしも彼のものではないという暗示があります。すなわち返り血です。ところが、二幕以降、彼が戦場から離れるとき初めて、無尽蔵に放出される血のイメージが現れます。そのイメージは、次第に腹の寓話(腹が富の源)と一致してきます。ここで一幕三場のヴォラムニアの言葉、とくに「ヘキュバの胸」という言葉を含む部分を検討したいと思います。

あのヘクターに

乳を飲ませたときのヘキュバの胸も、
ギリシアの剣を見下して、血を吐き出した
ヘクターの額ほどに美しくはなかった。

The breasts of Hecuba

When she did suckle Hector, look'd not lovelier
Than Hector's forehead when it spit forth blood
At Grecian sword contemning.

(1.3.41-44)

引用文は、母の教育理念と、その理念の実現としてのマーシャスの成長が語られる文脈の中におかれています。ここには、子どもは乳を通して母の性質を受け継ぐという観念がみえます。ヴォラムニアには「お前の勇気は私のものだった。お前はそれを私から乳とともに吸い取った」(3.2.129)という言葉もありますから。また引用には、二人のヘクターが言及されていますが、最初のヘクターが乳児であることによって、次のヘクターにもその乳児性が引き継がれています。

するとこのようなファンタジーが形成されてこないでしょうか。つまり、ヘクターを授乳するヘキュバの乳と、英雄ヘクターが流す血を同じものとするファンタジーが。この引用からは、コリオレーナスが授乳する対象はローマであることがわかります。ローマは彼にとって「子ども」(3.1.29) なのです。そしてヴォラムニアが授乳によってその性格と情熱を息子に鼓吹したいと願ったように、コリオレーナスもまた自分と似た者になることをローマの民衆に対して要求します。「彼は逃げる味方を押しとどめ、身をもって目ざましい手本を示し、臆病者の恐怖を楽しい遊びに一変せしめた」(2.2.103-05)。劇では、彼が人々を自分と同化させるオーラをもつことが示されています。

二幕から三幕にかけての執政官選挙の場面で、穀物の話題がふたたび浮上します。劇の冒頭で、民衆たちが穀物を求めて一揆を呼びかけたとき、彼らは自分たちの言い値で貴族から穀物を手に入れようとしたのでした。ところが、選挙の場面において穀物は、民衆の言い値であるとはいえ、一種の商取引によって民衆の手に渡ったのではないと述べられます。つまり、穀物は無償 (gratis) で配布されたと述べられるのです。これでは、交換ではなくて、贈り物になってしまいます。この状況設定がなされる中で、コリオレーナスの体から放出された血への言及が現れます。

彼が流した血は、
彼の体の血をはるかに超える量だと断言するが、
それは祖国のために彼が失った血だ。

(3.1.296-98)

ここには、穀物は出し惜しんだが、血を惜しみなく捧げた者がいます。民衆に対して穀物が贈り物として与えられる状況の中で言及される、主人公の無尽蔵とも言える血の放出は、それもまたローマに対する贈り物と考えることができると思います。贈り物というと、感謝や暖かい気持ちから相手になされたものと受け取りがちですが、このローマではそうではありません。貴族と民衆との階級的な差異は、両者の自然な感情の交流を妨げています。従って、穀物という贈り物にしても、血という贈り物にしても、贈り主の心の底には相手に対する敵意や軽蔑心が潜んでいます。すでに述べましたように、ヴォラムニアが授乳を通して自分の情熱を息子に鼓吹したいと願ったように、コリオレーナスは

流血を通して戦場での超人的な働きを模倣するよう民衆に迫ります。しかし、そのような行為は、身分を問わず誰にも成しえない無謀とも言える行為だったのです。簡単に言うと自殺行為です。コリオレーナスの流血によって恩恵を受けているからといって、そのような要請をされることは、民衆の側からすると、血の贈り物の背後に悪意があるといっても過言ではないでしょう。

メニーニアスの寓話を通してコリオレーナスの流血を眺めると、その血はローマという体全体をめぐるということになります。この劇は穀物・血・乳を等価なものみなしています。そのことは、当時の消化理論によっても裏付けられていました。すると、コリオレーナスの血がローマ全体を流れることによって、そこにはすべてのローマ人が血縁関係にあるという暗示がないでしょうか。「普遍的血縁関係」です。現代の我々からすると、これはファンタスティックな観念のように聞こえそうです。しかし、これはシェイクスピアの時代の絶対王政がもっていたイメージなのです。次に引用するのは、英国絶対王政時代の政治思想家フォーセット (Edward Forset) の『自然的な体と政治的な体の比較研究』(1606) です。当時の思想家は、どのような言語によって絶対王政を表現しているのでしょうか。

心臓はすべての器官の中でもっとも強く、しかも血管によって運ばれる血で養われない。一方、ほかのすべての器官は、心臓から血管を通して命を借り出すのである。国王も同様に、彼の王国の土地に関して、強く絶対的な地位にあり、ほかのすべての土地の所有者は国王から土地を譲渡してもらったのである。そのような議論を私は聞いたことがある。アリストテレスが心臓について述べていること、つまり、それは他のすべての器官に与えるけれども、他からは受け取ることがないということ、このことは王の威厳と恵み探さの良いモデルである。自らはなんの欠乏もなく、寛大な心で善をなし、救いを他に及ぼすことほど、神性に近いものはないからである。¹⁶⁾

この引用文を読んだ後では、この作品の見え方も少々変わってきます。コリオレーナスの流血をローマへの授乳とみる構成を劇がとり始めたとき、シェイクスピアは彼の時代の絶対主義の言語を借用していたという可能性が浮上します。実際、劇の後半、主人公のローマ攻撃の報がローマに伝わるに及んで、「独裁君主」(tyrant) とみなす言及がみられるようになります。

6 言葉の腐敗

このセクションでは、メニーニアスの寓話をまた別の角度から見てみたいと思います。それには、寓話がおかれている演劇的文脈をまず確認しなければなりません。貴族が貯めこんでいると民衆が考える穀物は、民衆の空想の中では、長く保存され過ぎたために、腐りかかっているようなのです。ですから、市民の一人は「お偉方が食いすぎている分でおれたちは助かるんだ。せめてその食い残しを腐らないうちに俺たちに回してくれたら、まだしも人間味があるというもの」と言います。それでは、民衆はメニーニアスの語る腹をどのように捉えるでしょうか。メニーニアスが言うように、体全体に食物を行き渡らせているなら、彼が言う通り、「滓しか残らないのだ」ということになります。しかし、飢えた民衆の空想、貴族が穀物を死蔵していると考えた民衆の空想の中では、腹は「体の中のごみ溜め (the sink o'th'body) である大食らいの胃袋」として現れます。さらに興味深い事実があります。ローマの貴族であるメニーニアスは、一揆に発展しそうな民衆の動きを鎮めるために寓話を語るのですが、その長い話（劇中では、民衆が「長すぎる」と感じます）は、功を奏したようには見えません。それもそのはず、その物語は民衆がすでに熟知しているものなのです。それにもかかわらずメニーニアスは、「敢えてもう少し言い古す (stale) ことにしよう」と、しつこく寓話を語り続けるのです。民衆は、陳腐な物語を再度聞かされることになります。メニーニアスは、穀物は腹から体の末端に到るまで運ばれていると言うのですが、それに対して民衆のひもじさはノーと答えます。劇冒頭の民衆の飢えはリアリズムで表現されていますので、観客もまた民衆の気持ちわかります。飢餓に苦しむ民衆にとっては、寓話は為政者に都合のよい嘘に他なりません。このようなドラマの構成、イメージの構成から何が読み取れるでしょうか。ここには、食物と言葉との並行関係があります。

キリスト教文化には、もともと言葉と食べ物との密接な連想があります。ある聖書事典によりますと、聖書にとって食べ物は大変重要なイメージであると書かれています。¹⁷⁾ 食べ物は社会の絆を固くしたり、契約を確かにしたりします。また食べ物の乱用にも注意を促し、人生には食べ物以上のものがあることも説いています。神の言葉と食べ物との連想は、例えば、「わたしに聞き従えばよいものを食べることができる」(イザヤ書、55:2)、「わたしが命のパンである。わたしのもとに来るものは決して飢えることがなく」(ヨハネによる

福音書、6:35)「すると、天から聞こえたあの声が、再びわたしに語りかけて、こう言った。『さあ行って、海と地の上に立っている天使の手にある、開かれた巻物を受け取れ。』そこで、天使のところへ行き、『その小さな巻物をください』と言った。すると、天使はわたしに言った。『受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い』」(ヨハネの黙示録、10:8-9)などがあげられます。言葉が食物として表象されるこの文化的伝統のなかでは、寓話とその劇的文脈が語る事柄がいつそう鮮明に浮かび上がります。すなわち、ローマの言葉は腐っている。ローマにおいては、言葉は人々の絆を固くするものではなく、人々を分断するものであるのです。この背景には、言葉と食べ物との連想だけではなく、都市と言葉の連想も機能しています(聖書に語られるバベルの塔のエピソードを思い起こしてください)。これについては後で取り上げます。

言語の腐敗が扱われるのは、劇の冒頭だけではありません。執政官を選ぶ選挙の場面にも穀物のイメージが再び浮上すると申しました。このローマの選挙はどのような形で成されるかと言いますと、候補者が通りに立って、民衆に自分への投票を促すようにアピールしなければならないのです。それは従来からの方式です。しかし、民衆を嫌悪するコリオレーナスが候補に挙げられる(彼の本心は執政官などになりたくありません)ことによって、選挙のシステムに内在する矛盾、すなわち言語の腐敗(少なくとも観客には)が暴露されることになるのです。この劇のある批評家は、選挙の文脈において顕在化する貴族と民衆の関係は、「追従の関係」であると述べています。¹⁸⁾ 英国ルネサンスの文学、とくに理想の宮廷人像を扱う文学の一つの重要なトピックは、君主への諫言の問題でした。この時代、君主は絶対的な権力をもっているために、直接的な諫言はなかなかむずかしい。むしろ追従的な廷臣が蔓延ることは大いに想像がつくことでした。『コリオレーナス』の中の追従はこれとは逆のベクトルをもっています。追従は、選挙のときだけ、貴族階級から民衆に向けられるのです。母親が主人公に「それなのにお前は、あの愚かな民衆どもにこわい顔ばかり見せる。やさしい言葉の一つもかければ、あの連中の好意と支持を得て、なにもかもうまく行くというのに。」(三幕二場)と忠告する通りです。追従の中には、民衆への愛想のよさだけでなく、公約も含まれます。それも言葉だけの。貴族にとって、それは一時的な口約束かもしれませんが。しかし、いつ飢饉や飢餓に襲われるかわからない民衆にとっては、候補者から自分たちに対する

「親切」の言質を取ることは切実な関心です。民衆からすると、公約の言葉は直ちに穀物の配給を意味したでしょう。民衆の切実さ、飢えのリアリズムの中で、言葉は食べ物なのです。

そのような民衆からすると大切な執政官選挙なのですが、「傲慢な」コリオレーナスの振る舞いために、選挙の場面は大混乱に陥ってしまいます。劇はこの混乱を言語の混乱として捉えています。

いったいどうなるんだ。ああ、息がきれる。

これはめっちゃめっちゃだ。ものも言えない。きみたち、

民衆のための護民官なんだろう。コリオレーナス、まあ我慢して。

シシーニアス、なにか言いなさい。

(3.1.190 - 93)

民衆の代表である護民官たちは、コリオレーナスが執政官になると、自分たちの地位が危うくなるという下心から、民衆の不安を掻き立て騒動に発展させます。「一度どなりはじめたからには / 途中でやめさせないで、 / じゃんじゃん騒がせてほしい / 即刻刑を執行しろと」(三幕三場)という具合です。また主人公の声という、彼の声は平時におけるコミュニケーションには向かない声なのです。「雷神のごときおまえの声の衝撃音」(一幕四場)や「太鼓と合唱するおれの戦闘用の喉よ」(三幕二場)と述べられる彼の声は、人の声と言うよりも音響です。すでに少し触れたように、二幕と三幕を中心として、都市の崩壊と言語の崩壊を同時に見るシェイクスピアの視点があると思うのです。そしてこのヴィジョンをもつ典型的な神話は、バベルの塔の物語です。私は、この劇の中盤のサブテキストとしてバベルの塔の神話があると考えています。バベルの塔は、「キリストの体」の観念と対立するところの「悪魔の体」の観念のバリエーションです。私は、この劇全体のサブテキストとして「悪魔の体」の観念が潜んでいると考えるのです。

さて再度、選挙の場面に戻りましょう。私はこの場面に、上に述べてきたのとは異なるもう一つの問い掛けがあるように思います。それは、富を持たない者は、与えることはできないのかという問いです。私たちは、地上においては絶対主義の君主のみが与えることができるような大きな贈り物(彼のローマへの授乳としての流血)をコリオライ戦でのコリオレーナスに見ました。しかし、

選挙の場面での彼は、他者から一方的に施し者を受け取る乞食として自分をイメージしています。

この唇のあいだに

乞食の舌を動かし、馬に乗るとき以外にはけっして
曲げたことのないこの膝を、施し物を受けるときの
乞食のように曲げるのだ。

(3.2.119-22)

また、劇の最初では、民衆の言い値とはいえ、金銭経済のなかで捉えられていた穀物は、選挙の場面で、それが無償配給されたことによって、民衆自身は「乞食」(3.1.17) になってしまいます。少なくともイメージの点で見ると、コリオレーナスと民衆とは同じ立場のものとなってしまいます。選挙の場面はまた、この両者のそれぞれの痛みが痛切に感じられる箇所でもあります。民衆の投票というか、候補者への支持は、「声」(voice) として与えられます。物質的な富はなにも持たない民衆ですが、彼らは声を与えることができます。彼らは最初、というのは護民官の企みに陥る前は、英雄の戦場での活躍に対する感謝の念をその「声」によって表わさねばならないと感じています。そうする自分たちの行為を「高貴」なものとして捉えています。そこには彼らの自尊心も感じられます。ですから、投票行為が嘲られること、これは彼らにとっては痛みです。コリオレーナスにしても、自分が不得意とする領域へやむなく立たされ、その領域にふさわしく演じなければならない、演技しなければならないという痛みを観客は理解できます。コリオレーナスと民衆は社会生活において、彼らとしては最も接近する機会を与えられながら、またイメージにおいても共に「乞食」となりながら、そのやりとりは両方に痛みを生み出しながら、分裂したままなのです。

7 言葉の贈り物

腹の寓話が隠蔽しているものは、栄養の源であると言いました。メニーニアスによると、この胃袋は「ローマの元老たち」を表わし、「どんな食物でも真っ先に受け取」と語られます。いったい誰から食物を受け取るのでしょうか。そして、ローマの民衆が得た穀物は結果的に贈り物として与えられたものだと

も言いました。常識的には、ローマの民衆に与えたのは元老ということになりますが、しかし腹の寓話は、元老たちも受け取ったことを示唆しています。だから、ここでもやはり、穀物の源は不明です。絶対主義の時代（つまりシェイクスピアの時代と言うことですが）における富の一方的な流出の観念を背景とすると、源が不明である富の配分は絶対主義的観念ではないことがわかります。絶対主義化では、富の源泉は（少なくとも政治的、イデオロギー的には）はっきりしていました。それは君主です。すべての富は君主から国民へと流れ出ます。

この劇の中には、そのような源をもった食物の流出のイメージは見られたでしょうか。ありました。少なくとも一人の人間から食物が与えられるイメージがありました。それはヴォラムニアとコリオレーナスにおいてです。ヴォラムニアの言葉には、乳児のヘクターに授乳するヘキュバのイメージがありました。ヴォラムニアは息子の養育経験に言及するときには、この授乳のイメージをもちだします。コリオレーナスには、流血という形での、ローマへの授乳の行為が見られました。この二人の場合には、彼らが源泉です。乳と血を与えることは、自分と似た者になれという、贈り物を受け取る者に対する促しを含んでいる点でも、両者の与え方は似ています。実際、一幕の構成は二場にヴォラムニアが息子の戦場での活躍を幻視する様子が描かれ、三場以降では、幻視されたそのままにマーシャスの活躍が舞台化されます。このようなイメージの構成、劇の構成をみると、我々の脳裏に浮かぶ言葉は、母子一体という言葉です。マーシャスの破壊性は母がそれを見て、喜ぶものなのです。そのことを示しているのが、一幕二場で話題になるマーシャスの息子が蝶と遊ぶ様子です。

ヴァレーリア さすがお父様のお子ですわねえ。ほんと、かわいらしい坊ちゃま。そう言えばこの前の水曜日、半時間ほど一緒に過ごしましたが、そのしっかりした顔つきときたら！きれいな一羽の蝶を追いかけていらして、捕まえては放し、放しては捕まえ、何度もそうするうちに、つまずいてお転びになったので、それで腹をお立てになったのか、いきなりその蝶を噛みちぎってしまわれました。ほんとうにもう、こなごなになるまで！

ヴォラムニア 父親がかんしゃくを起こしたときとそっくりですわ。

(1.3.60-69)

母の幻視が、この後すぐに実現する息子の戦場での働きであるということは、そこに当時の人々がもっていた授乳とその結果についての観念（乳を通して子どもは母親の性格を受け継ぐという観念です）が反映されているとも考えられますが、また、母の言葉を息子が体現するようになったのだとも言えるでしょう。

ここでもう一度、この劇では腹の寓話を通して、言葉と食物が等価にされていたことを思い出したいと思います。母の授乳においては母という源泉があるのだと言いました。ではこの劇は、乳児の段階にある子どもと母の関係において、乳（食物）とともに与えられる言葉もまた、源泉をもっている、すなわち、それは母であることが示されていると考えることはできないでしょうか。この劇が扱う母子関係は、母との密着と母に対する拒絶、その両方を含みます。一幕においては、母子の同一性が舞台化されています。マーシャスが母から乳とともに吸収したのは、戦士としてのヴィジョンだったと言えるでしょう。しかし、ただ単にそのヴィジョンだけでヴォラムニアを語ることはできないということは、二幕になると明らかになります。彼女は、息子が執政官選挙に出馬し、さらに出世することを期待するのです。これは息子からすると、自分が自分でいられる領域から、自分ではなくなる領域への追放に他なりません。従って、三幕になると拒絶が舞台化されることになるのです。三幕二場で母親は息子に、立候補者は選挙でどのように振舞うべきか、その具体的な方法を教授しようとしています。息子にとっては、立候補者にふさわしいマナーも言葉も、とても受け入れられない、嫌悪すべきものです。

さあ、おれの気性よ、消え失せろ、そのかわりに
売女の魂でも乗り移るがいい。太鼓に合わせて
戦場で鍛えられたおれの喉よ、笛のように細い
宦官の声か、赤子に子守唄を歌う小娘の喉に
変わってしまうがいい。

(3.2.113-17)

確かに観客にとっても、このときのコリオレーナスの反応は理解できるものであるでしょう。母によると、選挙の言葉は次のようなものなのですから。「自分の理性が命ずるままにではなく、ノ感情にかられて言わずにはおれないこと

をではなく、ノただ舌先に暗誦した言葉をのせればいいのです。ノそうすればその言葉はいわば私生児であって、ノおまえの本心の知ったことではないわけです。」しかし、選挙にふさわしい言葉とマナーをめぐる母子のやりとりは、選挙という特殊な場合に限定されたものとして受け取るのは間違いだと思いません。むしろ、そのとき、ほとんど身体的嫌悪感とさえ呼んでよいものと共に表明されるコリオレーナスの反発は、コミュニケーションに対する彼独自の反応が明確な形で表面化したものと捉えるべきです。サンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーは、西洋文化に広くみられる文学や言語における女性嫌悪が、母親が「言語的源泉」であるため、それに対して男性が反発した結果であるという解釈の可能性を示しています。¹⁹⁾ 授乳者が同時に言葉の養い手であるというわけです。コリオレーナスの目のレンズは特殊なレンズです。彼とその性格を共有するようなローマ人はいませんから。しかし、その特殊なレンズを通して眺められるローマ、このような特殊な選挙で政治的指導者を決めるローマは、コリオレーナスの目のレンズが見ているように、女性化しているローマ、女性としてジェンダー化されているローマであることがわかります。

8 むすび

『コリオレーナス』における身体のお話は、また都市のお話でもありました。階級、能力、立場のちがった人間が、一つの社会を構成して生きるためには言語が重要であるとシェイクスピアは語っています。言語の本来の機能が欠如している様子を演劇化することで、そのメッセージを届けようとしています。既に見たように、そこには身体イメージが大きな役割を演じていました。

注

- 1) 拙論は、2004年度国際言語文化研究科公開講座『古典を読み直す』（6月14日、於名古屋大学）での口頭発表の原稿と配布資料に加筆したものである。口頭発表での枠組みを保持するよう努めた。
- 2) 朝日新聞朝刊 2001年5月27日（名古屋）。
- 3) M・モース『社会学と人類学』II、有地亨、伊藤昌司、山口俊夫共訳、（弘文堂、1985年）第6部「身体技法」、121-156頁。

- 4) 樺山紘一責任編集『歴史学事典 第2巻 からだとくらし』(弘文堂、平成6年)
- 5) Anthony Giddens, *Sociology*, third edition (Oxford: Polity Press, 1997).
- 6) *Critical Terms for Religious Studies*, ed. Mark C. Taylor (Chicago and London: The Univ. of Chicago Press, 1998), p. 36.
- 7) Roy Porter, "History of the Body Reconsidered" in *New Perspectives on Historical Writing*, ed. Peter Burke, 2nd ed. (Cambridge: Polity Press, 2001), pp. 233-61.
- 8) ミシェル・フーコー『知への意志』、性の歴史第1巻、渡辺守章訳(新潮社、1986)
- 9) 荻野美穂『ジェンダー化される身体』(勁草書房、2002)の第三章「身体史の射程 - あるいは、何のために身体を語るのか」、99頁。また、荻野が多くを負っているバーバラ・ドゥーデン『女の皮膚の下』井上茂子訳(藤原書店、1994)の第一章「身体の歴史の出発点」も参照。
- 10) E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, Vol. 1 (1923; Oxford: Clarendon Press, 1974)
- 11) ミハイール・バフチーン『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳(せりか書房、1973)
- 12) エルンスト・H・カントーロヴィチ『王の二つの身体：中世政治神学研究』小林公訳(平凡社、1992)
- 13) この劇の幕場行数は *Coriolanus*, *The World Classics*, ed. R. B Parker (Oxford: Oxford Univ. Press, 1994) に拠る。
- 14) William Empson, "The Globe Restored" in his *Essays on Shakespeare* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1986), pp. 177-83.
- 15) R. B. Parker, introduction to *The World Classics Coriolanus*, pp. 65-66: "in productions he is given at most some smears of blood on face and arms and often there is no blood at all (e.g. in Olivier's performances)."
- 16) Edward Forset, *A Comparative Discourse of the Bodies Natural and Politique* (1606; New York: Da Capo Press, 1973), p. 30.
- 17) *Harper's Bible Dictionary*, ed. Paul J. Achtemeier (San Francisco: Harper & Row, 1985), "food", pp. 315-16.
- 18) Terence Hawkes, *Meaning by Shakespeare* (London: Routledge, 1992), p. 56.
- 19) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *No man's land: the place of the woman writer in the twentieth century*, Vol. 1: *The war of the words* (New Haven: Yale University Press, 1988), pp. 262-66.